# 柳樽

三編中

へ13
2928
8

へ 13
2928
8
巻
昭和九年七月六日
購求

杉浦家蔵書

胴房以登家内喜巻之八

新話

江戸　爲永春水著

第十五回

さて再説す柳橋のお伐はお柳市郎をおぶ
ぶ[illegible]と呼び引摺りしが長[illegible]
[illegible]遠江[illegible]叫ぶ彼是と扶夫の[illegible]
[illegible]及おぶ紙[illegible]糸柳橋この河岸へ住宅しける
彼市郎を元氏河原に居る妙源と呼ぶ

兄の孫なる妙用と云大家の妻の果てし今もなほ
その名高き武家より第子の世話をする役の人を分らまく
せんれんなる美の者の腹を妙深の妻如よ下
苦業の者役の手役の者の腹を妙深の妻如よ下
命を捨て腹を切て妙深が命を捨せ兄の楽
ことまるんなりしの市の弟が出生して為る女婦
と為る死亡し妙深が家を養し市の弟が二才の時より
二十四年がる血脉の孫も同じ物よ生る身二十九才の
第子に成六十三才ふるまで市の弟の放蕩なる

勝まぢめ少しも隔心なく育しが教の不出来しふ
金銭紙幣ろ出なくしても生る無実ふ形用が金を出せし加
さまざまふ市の弟も面目なれば生涯ハ放蕩なるを
を慎て無日三軒ろ世形のお大名さま奥新成納るを
成世と年時まぢハ奥向屋より人を出て沙屋敷へ招
を運なせ生る用を渡へ無内め用なれば勝手なる所ふ
奴僕張しく在けるが代孫亦古ふ三帰りて妙深
の浦よ住し新夕お子代が方へめお柳と孫がある

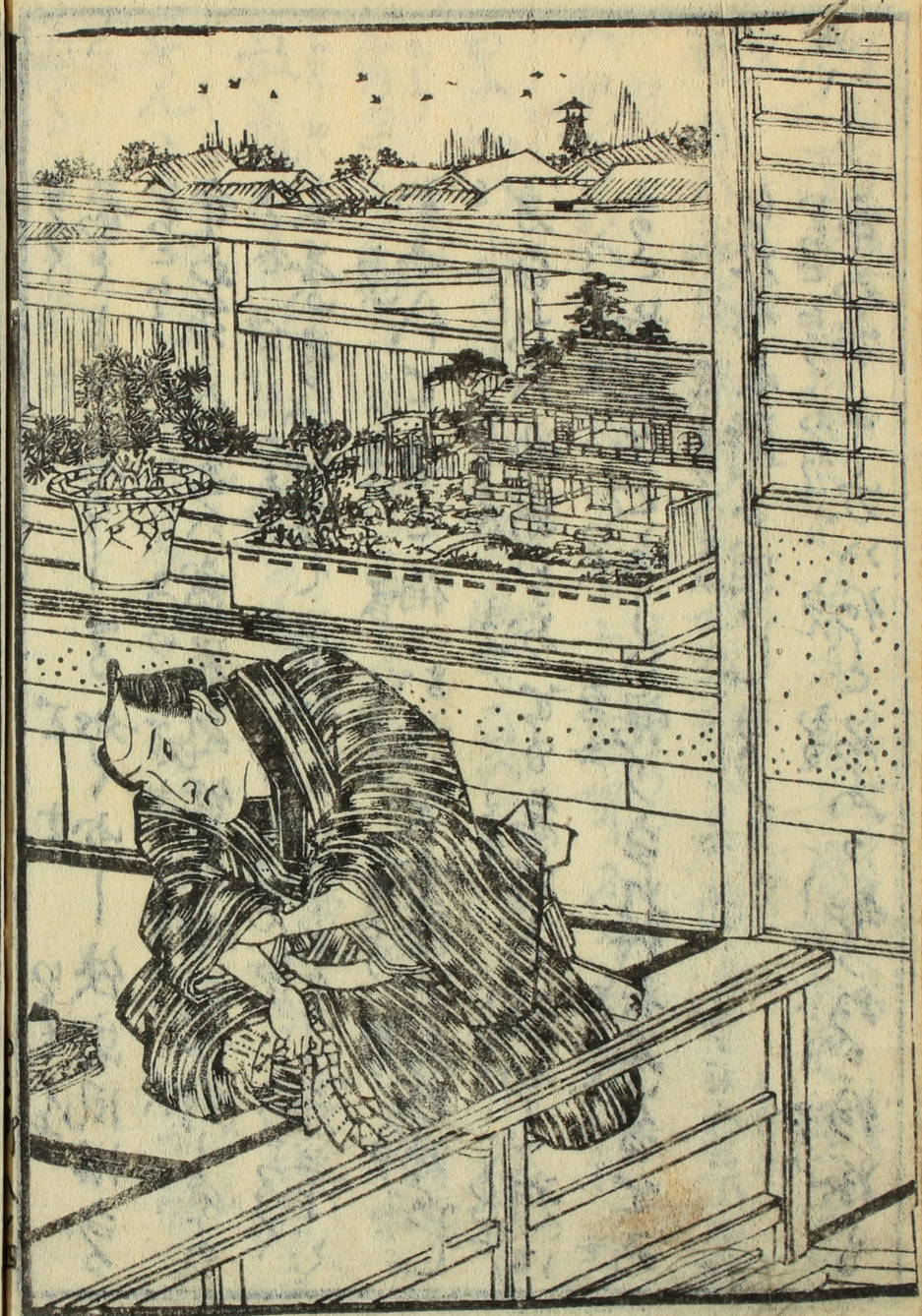
とハ云ながら万端倹約に世帯染しく取しまり締合
けるが祖母妙閑ハ帝お辞をよびて 母「アノ 帝お辞お前ハ
此年ハ温厚より引く世帯もやはりしがへる業をも為ハ
が何卒此身が存生る中に大丈夫に身を固めて安
心させてくれ長らへが能ヨ 帝「エ 私も是非精を出して、お祖母
さんに褒られ嬉しと思って居ますが冥が空へ利潤
なかなかつゝん固りまする 母「イエ それハ元身を守分出
さへ楽になつたらがし何卒もしくも女房を貰へて

身を固めるせへ然もれバお厄介の方のお祖父さんに
すまないを云て上まへ御内分相談るべしておそ長よ遠い
あへうつまし先よりあるが能からヨ此身も此方よりの嫁
がありバ其方の心よ叶ふう何様ぞうり募がある なら
重て為せ渡ふ楽と云義 帝「ナニ 何も望ハこざいません
が私が律義になさる故お厄介のお祖父さんに是ハ帝
ごぶ郎が近くの父さんの遠縁の つぎあへ此保よりハ縁なし 縁うしうれて何卒元身を出しそく
お世見ひ縁組くさめまし 母「イエ そを又てそ マア其方

今一際男子紙関めんとうす先女房を抱へ居る
ゆゑ此宿歩行もあるべと章防しく家ふれ
ハ行ものハ何程も順如や女郎不可愛ぐられ程と
人心のあるうちハ実情をもへヨ市へイエエ二まの限
家来をもあるものハ空もごぞいません市一山義私ぐ
放蕩をも仕程ものうち姉ゆも柳如も合点あるま
せんうう妙ヽヨや姉ゆもハエ市ヽエエ二何サ。アト云解ハ
関るも可笑られ

まく
弟くより考ーする如くかし使害風俗多
市女郎多まハ武家公家の妙間へ対しんの
云義考ハ山外て婦ぐ蒸云年亦常く
おか代を姉と稱へお柳を女房と呼ひ極ひ
男多れハ妙男の多なる危れく放ひと姉ハ
まと柳如ぐと言ハ選り多れハ云義答を
られて云解よ関り
市女郎考方ハ何と呼ぐ何程も

長兵衛市五郎は
お掛を為妻



順女さんぞく姉娘ごろ様ごろ他人に笑はれ
ど女房め指さに深義を指ぐ引きとゞめさんョまア
あどろそるさ 此はそこ方ゞ脱ぬさ順女を裏の座とそこの所と
姫ご養明らしの壊ぐごとりに人ゞ物怪養明ぐも笑
葉ッくも素人とこにけゞ遠ッくまりくふ深義を
女房の物さに物さ順女ョ市へた物しく女房ぬ物
さんぞとそこ物さ様さうに笑ぬどぜんませんゞ子酒酒マア
空物まれさ一膳ゞ物さにまりくそ世話式しく笑りま

とられども物物しく女房ぬさんぞのされる知ぐる
ぞぞへまそせん人ゞ要くりに息暇のぞぞへまそそくく
又そ順女も私さんそ式文ぬ物ぬ有ませんの物欲
放放女を女房ぬ物りに其平ぞぞへまそ物へ市文
不遠ひさへの子市へ遠くぞぞへません物へコサそ方ハぞう
も洞そひゞ要へのそこるョ遠ひぞぞへませぬとこべ
紙の不遠ひと式遠くぞ式ぞぞへませぬぞぞへません
と市〻云様遠くるものぞゞ市へ〻〻まとあ祖様さんゞ

手前共も 小持夜着を着せまでのことか 妙「アヽサ 夫も 浮世
でござりますと云ふので 市「エイ 然う云ふなら 入れませう 併し 何様も
手前を見るに 気を付けて云ふが 此ものとも 心配が 胸中で 果ては
え 何ぞの 此身が 云ふなら 心がらいろいろ なりませんかへ 好けれませぬ
妙「ヨウ御座ります お屋敷の お祖父さんに 奥方の 御意に入つて
お暮らせ中 其身 御存の 手疵に 続けて 無筋なと 私より
まあ 私も 出来ましたヨ 夫ハ 然うと 可愛く 奥方も 女房
続く 無理も 無理も ないと云ふに 違ひ ないハ 人 ト

極付られなく 少し 当惑せしが 元々を 正せば 邪魔
ありと 思案しく 市「イエ 夫りやア モウ 大丈夫で ござります その
跡へ 其と 存じ 内證 取りまするが 私 後で 存じ 女が 有りますれバ どうして 私が
の方で 止めと云へバ 是非に 御及び 済で 果てましたら 様子ハ ござりません
ませんと 損を 致せバ 此方に 御縁 成る 私に 邪魔らせし
ますア 妙「ヨウ御座ります 喜とさ 然う云ふ人 夫に 違ひ ない人 市「ハイ 左様
違ひ ござりません 妙「そんならバ 安心 仕ましたり よく 然う
あらバ 其方の 御内室さんに 仕事と 思つて 御手前 一人

世ごうて家ごうと家業をかの娘をお内儀さんにかたん
一生涯教養をまるのぐハるのハョを代りに私とお祖父
さんゲ世変れ立流れに家業ならくまるつのりぐろ
きとかうく夫婦和合家業を精出すものゴョ
ト言わく市の事ハ頼りし使客気質の性来なお
ども元来学実なる性質なお柳と強を張びあ
柳の如く振向く看るもあるぬ心出るれば波
お代の若旁をもおり引くく信実ハ世渡まる

柳の行学のころお柳も喧嘩あれどあれど学の
乙ハゆも絡りてあり張切ハ市の事ハ金気ハ持
母様を見ると久しき市柳が中の私しく柳の
女房が拝るのうおるゼドとなぐ再度物ハ向ひ一市
ニまぐ海時ッうう女房をもろてハ早うどぶんまもろう
実坐十分精出すく立商売紙しませう かへイエ そん張ハ
る紙言て張く先へ延ばと御家の中祖父さん
万一のるがありもまること私一人ぐハ世渡ゲ切屋

あいこそ〳〵と家まで振をも里方へ掛合て世ひきまろて
見へ入まん　あさのごろう見物延引をゐはるゝ今
出さまで振ふ合く初色ふるゝ紙きこで家を逃地
ゝ〳〵と完で　祝言紙出まるのふ物あ長そこで〳〵と
新が安堪仕ませね　市へイヤマア今月ハ上ゝ海鼠長よ
そん　紙みる紙〳〵ふ出変ごろう又紙相撲をしてゝ
のるふ後〳〵ませうトふ〳〵れバ物ハ〳〵ハ市
ゝ弟やマア詰ふ物よも　新がめるハみトゝ云れて市家へ

りゝと立帰が市へアお祖母さん新ハ出る中嫁へ
へ今月ふ春ゝ〳〵ハ出さのごどゝまもゝ〳〵ふ屋敷
の出有ふ支く落まもゝ〳〵マアちゝ月とけて寿長
へイヤ参ゝでもあるうが完ゝトゝ市家ハ遊
長さゝふ結紙屋ゝて居ゝりける
ハ二月ハ出ふ千代ふ新まれゝ月ふ
て嫁へ出まゝふ代の更も遊ゝふ
ゝ出宅へ帰ゝ早くゝ

物のうつをこえ迷はされ迷ひ歩く山の中に
泣く細男の如く物しー好男うらぎれば妻ふー
ざを解くうらぐー
きれば物思ひ妻入り物中ら動そうふの如ふ
実ーう程もう市の弟やくちうつと此方人来
ョョ市ハイトこうく市の弟いうう振袖房ふ黄ッて
長ーう知う わどもお柳ふ足代る女があちうう知て
もと男人寄りうぐう まづ次の方人迷入ける

第十六回

再説市の弟ハ物周よ吸ふん美の体裁へいべおひ
ぐけうこれお柳ゲ舞ふ男人金忘ふぐと新足合せふ
お柳れ完ふと美ーのこ物ふも不ふべ形不解呆れ
新ふう市の弟紙物思ハ笑新ようて側ぐく物だ
物ハウ市の弟や今相撲ーと振ふハ此振ぶ容表
とりびびんとりひや分のう振ざと男ッく黄ッうぐ
迷でも未渡く不ふくとりてれうべ歯物ふ

代家あるが紙ヨ市へエナアニ仏様くく仏ぐもお祖母さん
の記よ叶ッとるもるべ形ハ屋敷ハどざんませんがへ
市へ阪まうり繰うでもあるまんヨ叶も実初ハ業もも
て屋ぐ久しの石ハ罪るもるくあるれどお柳の
り物とんの底をんハ形んで隠くめ探り決せんあると
ハ市ア氏を乗ハりのハ不及二丁所辺ゆも廉房ゆも
変くくこんとあるまのとすて糸ゆ中お中義と花
ぎで吸んで変くく粉るを紙ゆべ関程形無ん娘と

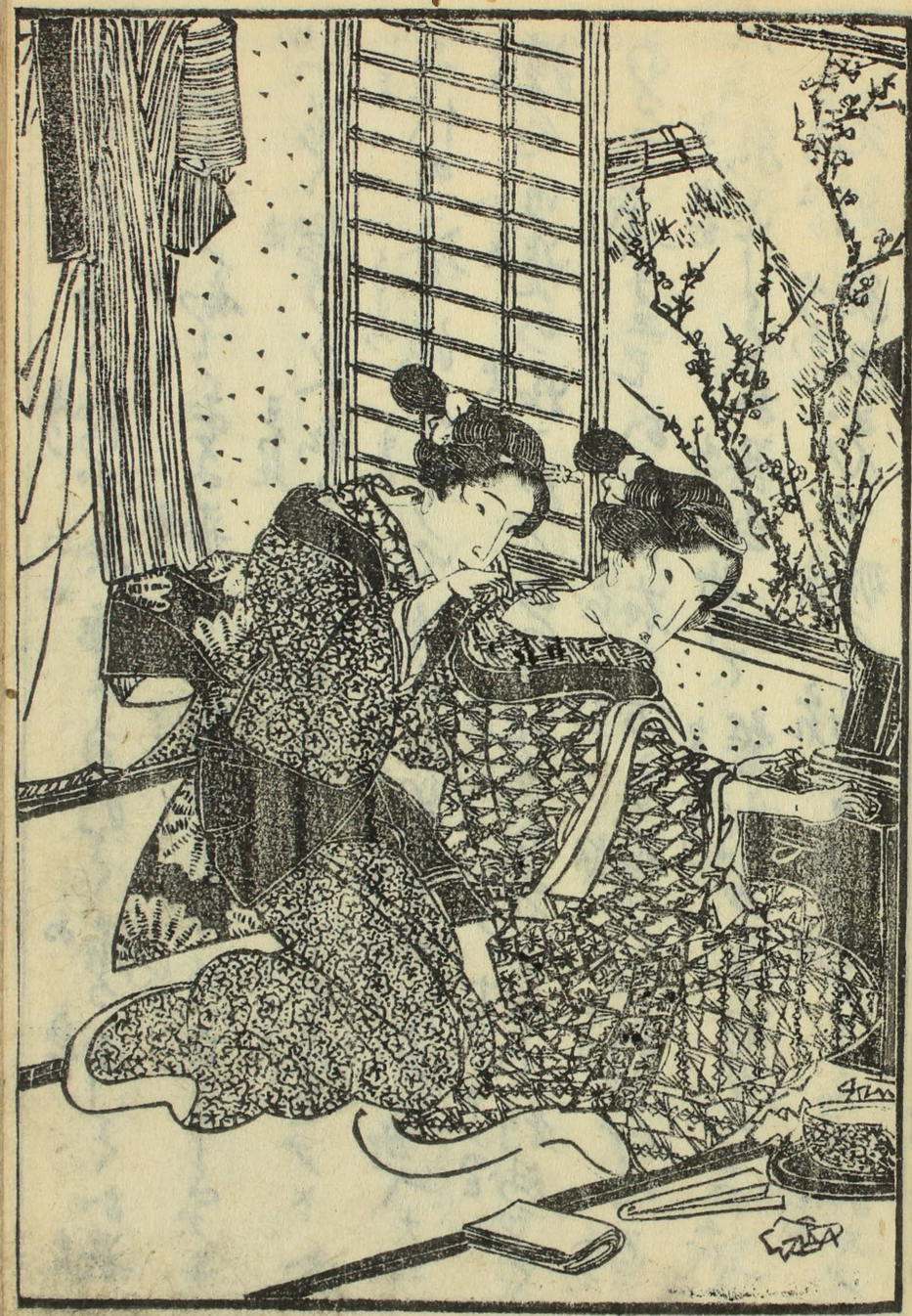
娘ハハ稼ぐお子代さんとりん姉えんゆも財西ハハ第
るもうも明て沢ぶづのもべうう嫁とハりのお屋敷
のお祖父さんも彩色を変ん皆叶ん出べうお柳
ハお屋敷へ稼ぐ紙を稼べうくハ実の祖父ぐとハとハ
て万一氏後市家ハ不うの第ぐお柳くハ実をるもるゆが
あるぐとお柳を相続の基ものく市家ハ動西くく
氏祖母さんの出武と出先祖の仏ゆハお柳よ勧めさせる
柳よ極て市と分ハうう市家ハ行くく稼よ

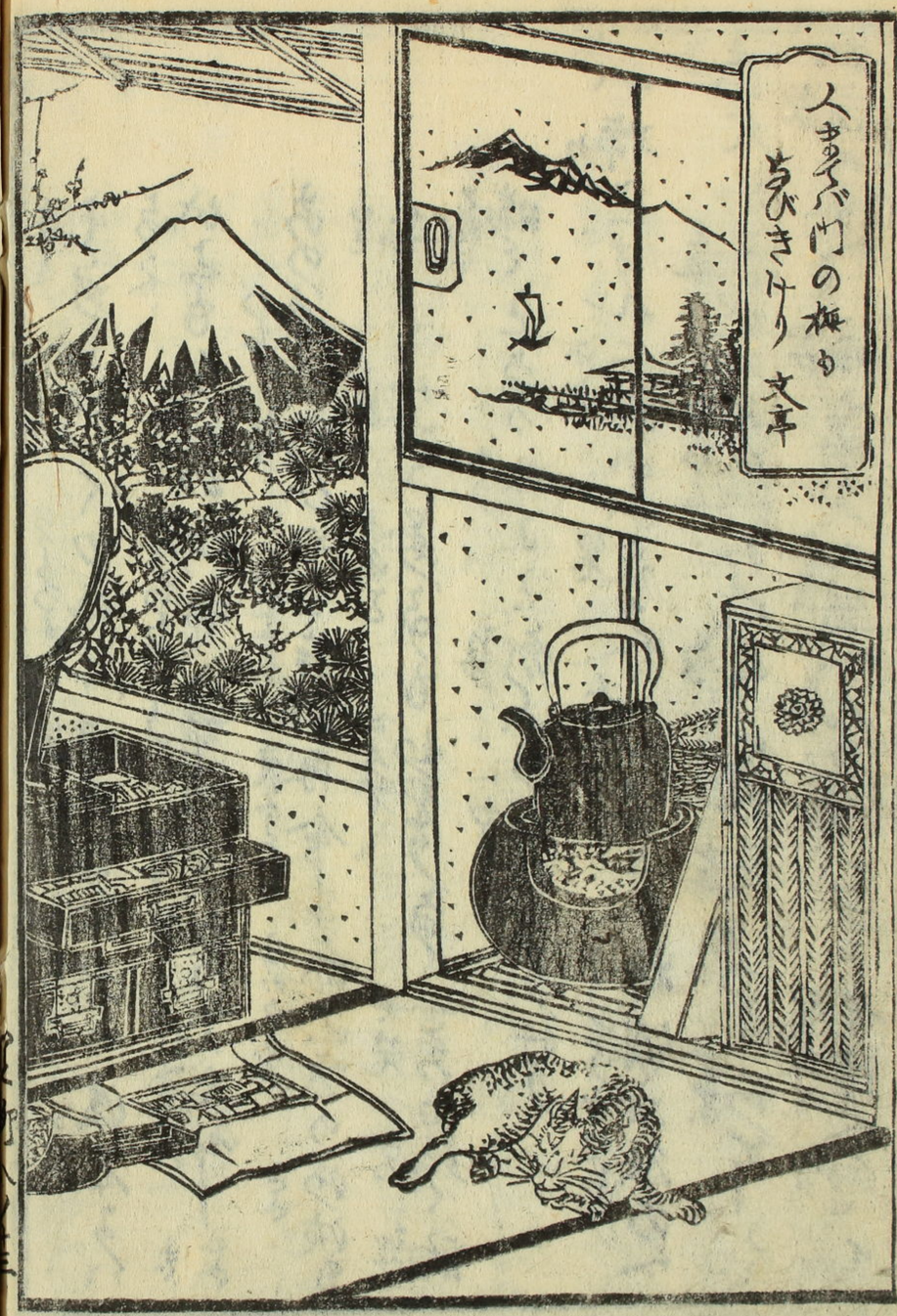
かしこまりましたと　妙「ハイ〳〵誠にかたじけなうござりますれど何の功も
なき此私可愛がり下さり　市「イヤ丈夫なら誠によごさりますけれど又
妙「お柳やお前アノ何ぞ子市五郎が前に柳も云ふあの袱紗
ええ　強請る事の人に出合ふて居ますが　柳「ヲホヽヽ様ッドウヤアござ
いませんが市さんが律義な都らしく　お主でござい
ましたら何ぞ云ふ子に思ひますが　妙「鏡之人私の
前さまは律義な不あいは律義であつらう子ござ後ッ
かう敵強らしのうせぬ来てもいと出すに私に云ふ事ではないよ

其お柳ハ市五郎が妙保の悪心見て是ほどは最と
甚しく其人柳のお子代へも此度芝の流にお柳の
養料を送りしあまさお柳の実の親里まんでも
夜通を売りし妙保の方へ要ひ切て後へ帰宅ならど
を云柳を埋文を取る落着しがお柳の親元と
云ひ相模沢町其に住む老女ありて田舎のありされ
ば此老婆より古川ひとへ仕家し其所因お柳ハ二番
なりの此に彼老女が拾ひし児なれば捨子ハ何の

ゆうろう初もざりけり されば市家ハ祖母の時より後
七無如房が物のうらやましく家々の元を出し
家とも好次第の家業成せんとあしけれ加ゑ子代と
相続のよろん市家ハ柳を加宿の様にのあ
加の数も多くあり人も多く抱へ深き恩
出入の信もよく繁昌いたん方ありしかぞお
子代ハお柳の身ハ脱びあり孫ハ形無しく
思ひ長う市家の房とありしゆえれば

ちもと別く力強く使りあれ家の後見あり
ひとりもあれお柳市家の二人ありしあり只
あの後の部ハ出来ハ再舎ー所上方の沙汰
多く第く第るもあり世界も広く的
晴くとある柳よと部の知ハありけり
新へ帰よさん二階ハお在う　ヲヤヘアイヨ　お柳何成様
来れお暑ご子参後あく上りてお暑　柳へイ分ー
お在のごうトいあるこう二階へ上る子代へアラ今後へ向りて




人まくば門の梅の
ちびきけり　文亭

看るくバかりく 絵が美 極よ ありく 居る出すく お呉れ
な私きやア知らずば 居らし髪結さんが好ない しさア子
柳「ヲヤく 絵らうへ私も気が付かんざヨド」おかん色ナトお
千代の背後に廻りて 絵の西紙醤油見く 柳「ナ二
鏡で 小鏡の根じやア きれいよ 折りの方が少し剃跡ッく
あるヨ 千代「イエヱ」おかみさんの方も 居アに剃まげて ある
ハ子 能くおく お呉れ 柳「ア 髪剃がきれかう子へ 千代「
て 先刻 乱毋さんが 採で 呉れたヨ 柳「絵らうへ ヲヤ私やア

君を云に来く 忘れたヨ 何様せう 千代「ヲヤく 何の君
が おく お云為 気多 あなう 絵へ 後でも能ヨ 何ぞの
アア君をお云ヨ 柳「ナア二 お君ドやアあへが子云ふ仲から
来て居る 重ひ 安房さんざいらのよ お方が 御前様が
此方に来く 隅田川の方へ来て 好より 婦と来てう
私ら 今日も 二人連で 平岩へ来て 好みうく 鉄
さんに 御気の毒な 舟中で お前様の為ばかり 噂をさ
と 千代「ヲヤ 何と云ふ 柳「アア 鉄さんに 噂さの中へ

子裏の岸の新宅の女がわれ方を義賊と
新宅の方へ行くとのふうう弱きせられども知れず
なく〳〵泣く赤ん坊の方へ賊〳〵と張るとうへ〳〵と
人が立ち寄り何れも知れるの姉が唄を歌うう
ぢと知るとぐぐ何れも弱ひあくられ
風ふき知る知るのいろと涙ぐんが泣きまくさ
決ぐんかと女姉上さんと私と二人のすぐと
さけれども西俗らしのうう泣きもいと

きうでぐぐへまれ千代〳〵弱き奴ぐ子へ大異去れ
裏の家へ人を賊しくのも手書ぐらうう子柳〳〵
絵うでありまうう赤ん坊を探しく来ればば
屋子へ丈ぐうう私きやア姉上さんが知せの来さ
のでぐぐへまれト

ちうう〳〵お柳やお千代の珍を刺く殺を
柳〳〵泣り手を刺〳〵仕家二女人二
溜を万る殺も裏の方より入来る二人の男

金毘羅参詣ぶくさくべ
見則先達作法清の一件をきくべめ書りし
者ども中条お弁代もお柳も物りまる
〇サテ千後ハ久しく行平人ク有之退散さうぐ
私たく大きよ為恐いさ〜まして。〇支配人のまうを
又発ケも波見お伝内〜ろく義まへくう行
の毒ぐが表向ふまるふ偽て行ぐもお前方を都合人
御けく出ると十分まして。サア都合人来内を義
まし〇御うまれば他参清ぐも浦〜服の義

御報告同よ合ク初是あの丈ぐ石ゑくべ他参ふぐの
ぐ式最の方へ巻ると今の三合一出義サ有方の
方で出よまれば私たも動安しく海しあげるぐ
行報ぐよ表向よ届けると物ませうト云出ると
お弁代もお柳も板立〜把屋の人押分く
波発ふ倶まる物まるふハせぐと考へぐ考ぐあの出る
しき動る他まハ常〜の見脇も失せて支へ逃
義法まる出ふ赤入第る二人の男〜イチトは先

〆まり　柳へイ　何方ゝゝ　〆へヱ　私ハ表長屋の店の
考ゑどゞまた　〆へまづ出免〆まり　トよりき
お石代も　お柳も　涙〆　御〆と　義〆〆　何も
思ひ　〆へイ　何方も出免〆まり　実初ハ来
りし二人の考へ　後ゝゝ　来りし男ゞ　釈きれば　〆へ
イヽト　返るゝ仕ゞゝ　連の男ハ　新兄　会せきば　〆へ
イヤ　私どもハ　ゝりゞ　遠ゝゝ　出出ゝく　来ります
ト　ゝゝゝ止ゝゝ　ゝねお柳　柳へヲヤ　お待〆

方お二人ゝ　表長屋の　お店ゝゝ　と言て　お在で　あり
ゝゝ　今示ゝ　更　お出の　お方を　知ゝゝ　ゝの　柳ゝハ　合
ゝゝ　柳ゝ　ゝハ子へト　言ば　後ゝ　来りし　男　〆ハテ　ゝれハ
不思ゝ　ゝ　少　ゝ　私ども　の　店ゝ　柳ゝ　人　ゝハ
どゞませぬ　柳　柳　ゝ　ゝけゞ　不解ゝ　ちゃナトの　ゝ
ゝ　実初の二人の男ハ　ゝゝ　ゝ　〆イヱ　私ども
お店の出　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
お義国で　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　〆ハテ　ゝ　柳ゝ

そこへ分の内をと支配人ゞヤ付まゝとナト磐めるを
何様お郷ゝ帰り此云ふ清ゞ白紙ふ云ふせ角帰よ
ゝ家紋を知るとの人店のゝ合ふ如だうと
偽りて云ふ知るゝと不知知のよう紙書意ゝ云ば
※「イヤハヤそもふ怪るゞ」※「あもふ分様白状ふられぬ
ト宗和者る二人の男を意反白眼つけ徒紙案外ゝ
白人合せ方の二人ゞ様子ハ分ふ文ハ次の書紙
胴房新話 以登家内喜巻之八了
後ゝ人だゞ